

# 高齢者の期待的介護ネットワーク —フォーマル・ケアとインフォーマル・ケアの組み合わせパターン別分析—

山口 麻衣\*

## 要約

第1回全国家族調査(NFRJ98)の高齢者データを用いて、ジェンダーの視点から、高齢者の期待的介護ネットワークにおけるフォーマル・ケア(FC)/インフォーマル・ケア(IC)の組み合わせパターンを分析することを研究目的とした。配偶者と子の有無で類型化して分析した結果、有子者全体の約1割がFCのみ、約3割がFCを含めた回答であること、有子者全体及び有子有配偶者の男女間の組み合わせパターンに有意差があることが確認された。FCのみの回答やFCを含む回答に対するロジスティック回帰分析の結果、有子有配偶者の場合、学歴、性別役割分業観、老親扶養義務感の影響が強いことがわかった。二次分析の制約はあるが、高齢者ケア政策の課題であるFCとICの関連を検討する上で、配偶者や子の有無やジェンダーを加味しつつ、高齢者の期待的介護ネットワークにおけるFC/IC組み合わせパターンを分析する有効性が示された。

## キーワード

高齢者の期待的介護ネットワーク、フォーマル・ケアとインフォーマル・ケアの組み合わせ、介護の社会化、ジェンダー、社会的ケア

## I. 研究の背景と目的

介護保険制度導入に伴い、介護の社会化が促進され、家族を中心としたインフォーマル・ケア(以下 IC)と社会福祉サービスに代表されるフォーマル・ケア(以下 FC)との関連や協働体制のあり方が重要なテーマとなってきた。介護実態においては高齢者(要支援以上)の主介護者の7割弱が家族内の女性(妻21%, 息子の妻28%, 娘19%)であり(H12年度介護サービス世帯調査, 内閣府2002)、ジェンダー化されたケア役割を反映した体制となっている。今後、いかに介護の社会化が図られていくのか、ジェンダーの視点から高齢者ケアにおけるFCとICの関連性を検討・分析するべきであろう。

また、公的な介護システムが措置制度から契約制度へ移行した結果、利用者の主体的決定が重視されるようになったことから、高齢者自身のケアに対する期待に着目して、FCとIC関連性を分析する意義が高まったと考えられる。この高齢者の期待する介護必要時の担い手との関係を期待的介護ネットワークととらえ、そのネットワークにおけるFCとICの組み合わせパターンを把握し、関連要因を分析することにより、今後のケア体制を検討する上での有益な知見を得られる可能性がある。そこで本研究は、ジェンダーの視点から、高齢者の期待する介護ネットワークにおけるFCとICの組み合わせパターンについての分析方法を検討した上で、第1回全国家族調査(以下, NFRJ98)のデータを用いて二次分析することを目的とする。

【\*上智大学大学院】

## II. 先行研究と分析枠組みの検討

高齢者の期待的介護ネットワークにおける FC と IC の組み合わせパターン分析の枠組みを検討するために、①実態と期待ベースのソーシャル・サポートに関する研究動向、②FC と関連づけた理論枠組みモデルに関する研究動向、③介護ネットワークに影響する要因に関する研究動向の 3 点についてまとめてみたい。

### (1) 実態と期待ベースのソーシャル・サポートに関する研究動向

高齢者ケア研究はソーシャル・サポートやネットワーク研究とともに発展してきた。サポート研究においては概念や理論の曖昧さが指摘されている(野口 1991 ; 藤崎 1998 ; Krause 2001 など)が、サポート概念には実態ベースとサポートを受ける将来を想定した期待ベースのアプローチがある。Krause(2001)は、ソーシャル・サポート研究において高齢者の健康や幸福への影響を分析するには必要時に援助が受けられるという認知を反映した「期待的サポート(anticipated support)」が実際の受領サポートよりも健康や幸福感に大きな影響を与えている点を論じ、期待ベースの分析の重要性を示している。

日本におけるケアやサポート研究においても、実態ベースと期待ベースの両方のアプローチから研究が行われている。実態ベースの研究は、たとえば、在宅介護態勢に関する分析枠組みを用いた質的研究(藤崎 1998)やサポート実態を配偶者と同居子の有無で類型化した上でサポート授受のモラルへの影響を論じた研究(平野 1998)などがある。期待ベースの研究では、ケア必要時の支援享受可能性の性差・地域差を示した研究(奥山 2000)、家族とフォーマルサポート源への手段的サポート選好度が同程度に高いことを示した研究(権・岡田・白澤 2004)、介護の可能性は配偶者と配偶者以外の同居家族間でのみ階層的補完関係があったことを示した研究(古谷野・安藤・浅川ほか 1998)などがある。また、大和(2004)は、「自分自身で日常的世話ができなくなったとき、それを他の人にしてもらうために動員する人間関係(大和 2004:367)」を介護ネットワークと定義し、介護が必要という状況を想定してネットワークをとらえる方法の意義として、家族関係の実態を推測できる点や個人の希望や選好を反映しており、介護のあり方や政策を予測する材料となる点をあげている。これらの研究も、期待的ベースのアプローチの有用性を示している。

### (2) FC と関連づけた理論枠組みモデルに関する研究動向

次に、FC と IC の関連を分析する既存の枠組みを概観すると、高齢期のサポート必要時のネットワークに関する理論枠組みとしてコンボイ・モデル、課題特定モデル、階層的補完階層モデル、社会的ケア・モデル、代替モデルなどがある。コンボイ・モデルは、ライフコースの視点から個々人は関係の近い人を中心とした人々に見守られながら生活しているととらえ(Antonucci and Akiyama 1996)、インフォーマルな関係の分析を主眼にしている。課題特定モデル(Litwak 1985)は、第一次集団とフォーマル機関の機能にあった最適な課題があり、専門性の高い課題やたとえば 24 時間必要なケアなど第一次集団の資源を超える課題の場合はフォーマル機関が適しているととらえている。階層的補完モデル(Cantor 1979)は、援助者との関係性を考慮した個人の選好を基準に分析し、フォーマル機関はインフォーマルなサポートが得られない場合の最後のよりどころとしてとらえられている。Cantor と Brennan(2000)は、さらに階層的補完モデルを含めた社会的ケア・モデルを提唱

し、社会的ケアシステム全体の中でのインフォーマル・ケアとフォーマル・ケアの相互関連を強調している。また、FC と IC の関連を示したモデルとしては、FC が IC を代替するという実態ベースのモデル(Greene 1983)もある。

このように欧米の理論モデルにおいてはインフォーマルなサポート研究だけでなく、フォーマル機関との関連を含めた分析枠組みが提示され、実態だけでなく期待ベースでも論じられている。しかし、FC と IC の相互関連については十分考慮されているとは言いがたい。特に、日本における介護保険制度開始という歴史的・社会的文脈を加味すれば、ケア・パッケージの要素として FC と IC が連携しているあり様を分析する必要がある。

この FC と IC の相互関連については、サポート研究よりも介護の社会化や社会的ケアに関する研究において多く議論されている。介護の社会化は多様なとらえ方があり、たとえば介護の責任主体の機軸の変更ととらえて論じた研究(下山 2000)、家族(女性)を基本に据えたままの社会化であると指摘した研究(杉本 2001)、介護の社会化の研究において、要介護者にとっての社会化と介護者本人にとっての社会化の二つの意味がある点や、介護の社会化を福祉の脱家族化と捉えて論じた研究(栃本 2000)などがある。社会的ケアに関する議論としては、たとえば、ジョンソン(1999=2002)は、高齢者や要介護者への社会的ケアは 4 部門(政府・民間企業・ボランティア部門・家族などのインフォーマルな部門) から成り立っており、福祉ミックスにおける部門間の関係・バランスを理解することが重要であると論じている。これらの議論をふまれば、期待ベースのアプローチにおいても FC と IC の組み合わせを把握する分析枠組みが必要であろう。

### (3) 介護ネットワークに影響する要因に関する研究動向

次に介護ネットワークに影響する要因に関する研究動向をみると、性別や社会階層などの属性が介護ネットワークのあり様に関連していることがわかる。たとえば、女性の場合、階層が高い方が家族に加えて専門機関を介護のネットワークに含める人が多く多様であることを示した研究(大和 2000)や、親への世話に関する実証研究の結果、子の属性や社会・経済的環境要因よりも親の属性(親年齢、配偶者有無、同・別居、地理的距離など)が有意であったことを論じた研究(白波瀬 2000)などがある。

今回利用した NFRJ98 のデータにおいても、男性は年齢や階層に関係なく、妻を自分の介護者としてあげるが、女性は高齢期においては階層が低いと子夫婦、高いと専門家をあげる傾向がある(大和 2001; 大和 2004)との知見が示されている。しかし、配偶者や子の有無を加味し、介護ネットワークにおける FC と IC の組み合わせを分析した研究は限定的である。さらに、ケアに関しては規範的要因が影響すると考えられるが、性別役割分業規範や老親扶養義務感などの規範と介護ネットワークの関連を中心に分析した研究は少ない。ただし、高齢期の世代間ネットワークに関する研究(前田 1999)は、選択-制約モデル(Fischer, Jackson, Stueve ら 1977)を参考に、世代関係を選択する条件に資源や地理的条件だけでなく規範的条件を含めている。介護ネットワークに関連する要因を検討する上でも規範的要因を含めて検討するべきであろう。

以上のような先行研究における知見から、期待ベースのアプローチの有用性が示されながらも、期待ベースにおける FC と IC の関連を分析した研究が少ないこと、ジェンダーの視点からの規範を含めた FC と IC の関連要因の研究が乏しいことがわかった。そこで、本研究では、高齢者自身が要介護時に期待する FC と IC のネットワークの組み合わせを期待的介護ネットワークとして概念化し、

認知された担い手のうち、特に主な担い手となりうる FC、配偶者、子どもの組み合わせパターンを中心に分析する。期待的介護ネットワークにおける FC と IC 組み合わせパターンには高齢者自身の配偶者や子どもの有無と関連して男女差があると予測する。さらに、期待レベルの FC/IC 組み合わせパターンに影響を与える要因を分析するため、FC のみあるいは FC を含めた介護ネットワークを認知した場合に着目する。FC のみあるいは FC を含む組み合わせパターンには、①高齢者属性、②調査時の家族ネットワーク状況、③規範意識(性別役割分業観、老親扶養義務感)の 3 要因が関連すると予測する。

### III. 分析データと分析方法

本稿で使用するデータ NFRJ98(1999 年実施、回収率 66.5%)は、代表性の高い全国調査データ(無作為抽出)であり、詳細な調査方法や結果はすでに報告(渡辺・稲葉・嶋崎 2004)されているため省略する。本稿のサンプルは 65 才から 77 才の回答者(1503 名)であるが、主な分析は有子者(1410 名)に限定し、男女別に有配偶者と無配偶者に類型化した。

主な従属変数は介護必要時に期待する介護ネットワークの組み合わせパターンである。具体的には、寝たきりなどで介護が必要になったときに頼りにする相手についての質問項目を分析する。この質問の回答は「①配偶者、②親・兄弟家族、③子ども・その配偶者(以下、子等)、④その他の親族、⑤友人や職場の同僚、⑥近所(地域)の人、⑦専門家やサービス機関(行政・金融機関・家政婦など、以下、フォーマル(=FC)機関)、⑧誰もいない」の 8 選択肢(複数回答)があるが、⑧を除いた 7 つの選択肢の組み合わせパターンを FC・配偶者・子等の回答から類型化し、配偶者の有無別に男女差について  $\chi^2$  検定をおこなった。

さらに、組み合わせパターンの規定要因を分析するため、組み合わせパターンに含む FC 機関の回答に注目した。具体的には「FC 機関のみを選択した者(以下「FC のみ」)」と「FC を含めた者(以下「FC 含む」)」に 1、その他の者に 0 を与えた従属(ダミー)変数に対するロジスティック回帰分析を行った。独立変数群は、①高齢者属性(性別、年齢、学歴、本人健康度)、②調査時の家族介護ネットワーク状況(配偶者健康度、子ども数、同居子有無、子サポート受領の有無)、③規範(性別役割分業意識、老親扶養義務感)とした。男性に 1 を与えて独立(ダミー)変数「性別」とし、旧制中学校・新制高校卒以上の者に 1 を与えて独立(ダミー)変数「学歴」とした。本人および配偶者の健康度は健康であるほど値が大きくなるよう逆コード化(5 件法、1=非常に悪い)、子サポート受領は直近 1 年間の経済以外の援助を子から受けた者を 1 とする独立(ダミー)変数とした。規範は強いほど値が大きくなるよう逆コード化(4 件法、1=そう思わない)し、性別役割分業観は 1 項目、老親扶養義務感は長男扶養と同居扶養に関する 2 項目を尺度化して使用した。

### IV. 分析結果

【基本属性】標本全体の 7 割強が有子・有配偶者、2 割が有子・無配偶者である(表 1)。有子・有配偶者(N=1097, 平均年齢 70.0(SD=3.5))の場合の主な属性を示すと、有効回答の 42.1%が女性、

47.0%が高卒以上の学歴, 46.5%が子と同居, 22.6%が子からの支援を受ける。有子・無配偶者(死別・離別を含む, N=313, 平均年齢 71.6(SD=3.6))の場合は, 83.7%が女性, 37.6%が高卒以上の学歴, 65.8%が子と同居, 38.0%が子からの支援を受ける。

なお, 規範に対する回答では, 有子者の場合, 性別役割分業規範には 77%, 長男扶養規範には 53%, 同居扶養規範には 69%が肯定的回答をしている。

表 1 男女別・子有無別・配偶者有無別の対象者数と頻度 (人数: 構成比)

	調査時有子者			調査時無子者		総合計
	有子者合計	うち有配偶者	うち無配偶者	有配偶者	無配偶者	
男性	686(95.0%)	635(88.0%)	51(7.0%)	27(3.7%)	9(1.3%)	722(100%)
女性	724(92.7%)	462(59.2%)	262(33.5%)	25(3.2%)	32(4.1%)	781(100%)
合計	1410(93.8%)	1097(73.0%)	313(20.8%)	52(3.5%)	41(2.7%)	1503(100%)

(注) 有子無配偶者のうち女性 1 名, 無子無配偶者のうち男性 7 名, 女性 22 名は未婚者。

【FC/IC 組み合わせパターン】まず, 介護が必要な時に頼る相手に関する複数回答の結果をみると(表 2), 全体では子等(53.5%), 配偶者(49.0%), FC 機関(25.9%)の順で多く, 有子者に限定した場合も同様の結果であった。有子者の配偶者の有無で比較すると, 有配偶者の場合は配偶者(63.9%), 子等(51.7%), FC 機関(23.3%)をあげているのに対し, 無配偶者の場合は子等(75.0%), FC 機関(30.2%)であった。

表 2 介護が必要時に頼りにする相手の回答者頻度 (全体および有子者: 複数回答)

	高齢者全体	有子者全体	有子/有配偶者	有子/無配偶者
(1) 配偶者	49.0%	49.8%	63.9%	—
(2) 親・兄弟家族	8.8%	8.1%	8.1%	8.1%
(3) 子等(=子とその配偶者)	53.5%	56.9%	51.7%	75.0%
(4) その他の親族	2.8%	2.7%	2.1%	4.9%
(5) 友人や職場の同僚	0.8%	0.7%	0.5%	1.6%
(6) 近所(地域)の人	1.7%	1.7%	1.7%	1.6%
(7) フォーマル(=FC)機関	25.9%	24.8%	23.3%	30.2%
(8) 誰もいない	3.6%	2.5%	2.0%	4.2%
有効対象者数	1484	1394	1086	308

(注) 有効対象者数は全項目無回答者(15名)とすべてに「いいえ」と回答した4名を除いた数。

次に, 有子者の場合に介護を頼る相手の組み合わせを配偶者の有無で分けて男女差をみると(表 3), 男女差は全体および有配偶者の場合に有意であった( $p < .001$ )。FC のみの回答は, 有配偶者

(7.7%)に比し、無配偶者(16.0%)の方が高いが、有配偶者の場合、女性(8.7%)は男性(7.0%)よりFCのみの割合が高い。また、配偶者のみ(男性40.9%,女性20.3%)および子等のみ(男性12.3%,女性34.1%)の回答割合に顕著な男女差がみられた。無配偶者の場合、男女間に有意差はなかった。FC機関を含めた組み合わせ(表3①-⑤)は、有子者全体および有子・有配偶者は約3割、有子・無配偶者の場合は約4割で、いずれも女性の方が男性より高い割合を示した。また、全体の約9割がFC機関・配偶者・子等だけの組み合わせ(表3の①-④と⑥⑦)で回答をしていた。

表3  $\chi^2$ 検定結果：介護が必要時に頼りにする相手の組み合わせパターンの男女差比較  
(有子者のみ、配偶者有無別、単位：%)

組み合わせパターン	有子者全体			有子・有配偶者			有子・無配偶者		
	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計
①FC機関のみ	7.5	11.6	9.6	7.0	8.7	7.7	13.7	16.7	16.0
②FC機関と配偶者のみ	3.2	2.0	2.6	3.5	3.1	3.3	—	—	—
③FC機関と子等のみ	1.5	7.3	4.4	1.3	5.0	2.8	3.9	11.3	9.9
④FC機関・配偶者・子等のみ	7.7	5.0	6.3	8.3	7.9	8.0	—	—	—
⑤その他(FC機関含む)	7.2	10.1	8.7	6.7	8.1	7.2	13.7	13.6	13.5
⑥配偶者のみ	37.8	13.0	25.1	40.9	20.3	31.9	—	—	—
⑦子等のみ	15.8	41.7	29.1	12.3	34.1	21.2	58.8	55.3	54.8
⑧配偶者と子等のみ	16.1	7.6	11.7	17.4	11.8	14.9	—	—	—
⑨その他(FC機関含まず)	3.2	1.8	2.5	2.7	1.1	3.0	9.8	3.1	5.8
合計%	100.0			100.0			100.0		
有効対象者数	679	715	1394	628	458	1086	51	257	308
$\chi^2$ (df)	232.2(8)***			117.5(8)***			n. s.		
【FCを含む①-⑤合計】	27.1	36.0	31.6	26.8	32.8	29.0	31.3	41.6	39.4
【FC・配偶者・子等だけの組み合わせ①-④&⑥-⑧合計】	89.6	88.1	88.8	90.7	90.9	89.8	76.4	83.3	80.7

注1) 網掛け( )の数字は組み合わせパターン内の、フォーマル機関を含めている場合

注2) \*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$  \*\*\*  $p < .001$

【変数間の相関】有子者データにおける2変数間の相関関係で重要なものを示すと、「FCのみ」は、「FC含む」( $r = -.48$ )と老親扶養義務感( $r = -.13$ )と  $p < .001$  水準、学歴( $r = .09$ )、子ども数( $r = -.08$ )、性別役割分業観( $r = -.09$ )と  $p < .01$  水準で有意な相関を示した。「FC含む」は、性別( $r = -.10$ )、老親扶養義務感( $r = -.13$ )と  $p < .001$  水準、学歴( $r = .10$ )、性別役割分業観( $r = -.08$ )と  $p < .01$  水準で有意な相関を示した。

【ロジスティック回帰分析】「FCのみ」と「FC含む」に対するロジスティック回帰分析の結果(表4)、有子・有配偶者の場合、他変数統制後に「FC含む」には、学歴( $p < .01$ )と老親扶養義務感( $p < .05$ )、「FC含む」には、学歴( $p < .01$ )、性別役割分業観( $p < .05$ )、老親扶養義務感( $p < .05$ )が有意で

あった。高学歴の者はそうでない者よりも、「FCのみ」の回答が2.2倍、「FC含む」の回答が1.7倍となり、老親扶養義務感が強いほど、「FCのみ」の回答が17.0%、「FC含む」の回答が10.6%低まる。有子・無配偶者の場合、他変数統制後に「FC含む」には、学歴( $p<.05$ )のみ、「FC含む」には、老親扶養義務感( $p<.01$ )のみが有意であった。高学歴の者はそうでない者よりも、「FCのみ」の回答が2.9倍となり、老親扶養義務感が強いほど、「FC含む」の回答が22.4%低まる。

表4 「FC機関のみ回答者(=FCのみ)」及び「FC機関を含む回答者(=FC含む)」を従属(ダミー)変数とするロジスティック重回帰分析  
(有子者のみ、配偶者有無別、オッズ比(=Exp(B)))

	有子・有配偶者		有子・無配偶者	
	「FCのみ」 Exp(B)	「FC含む」 Exp(B)	「FCのみ」 Exp(B)	「FC含む」 Exp(B)
性別(ダミー変数; 男性=1)	.789	.782	.603	.500+
年齢	1.014	.993	1.071	1.000
学歴(ダミー変数; 高卒以上=1)	2.221**	1.698**	2.892*	1.437
健康状況(本人; 1-5, 1=非常に悪い)	1.046	1.115	1.365	1.107
健康状況(配偶者; 1-5)	.858	.888	-----	-----
子ども数	.885	1.004	.839	.871
同居子(ダミー変数; 有=1)	.918	.968	.474+	.861
子からのサポート(ダミー変数; 有=1)	.743	1.165	.816	.873
性別役割分業観(1-4)	.786+	.840*	.885	1.053
老親扶養義務感(長男扶養・同居 1-8)	.830*	.904*	.831	.776**
定数	.283	1.732	.002	2.214
$\chi^2$	32.7***	38.3***	24.1**	22.2**
-2対数尤度	492.5	1086.4	173.0	315.6
Nagelkerke R <sup>2</sup>	.080	.058	.167	.114
有効対象者数	924	902	257	254

注) + $p<.1$  \* $p<.05$  \*\* $p<.01$  \*\*\* $p<.001$

## V. 考察と今後の課題

本研究では要介護時に期待する介護ネットワークについて高齢者自身の配偶者や子どもの有無から類型化したFC/IC組み合わせパターンを提示し、男女差やFCに焦点をあてた関連要因の分析を行った。ここでは、①類型化の意義、②FC/IC組み合わせパターンに関連する要因の検討、③ジェンダーの視点からの知見の3点について考察した上で、今後の課題をまとめた。

第一に、高齢者自身の配偶者や子どもの有無による類型化により、期待的介護ネットワークにおけるFC/IC組み合わせパターンが異なることが確認できた。ケアを頼る相手に対する複数回答の組み合わせを分析することにより、担い手としての認知の有無だけでなく、例えばFC機関のみに期待

する高齢者がどの程度いるのかなど、複数回答結果だけでは把握できない実態を確認できた。有子者の約1割(有子有配偶者の7.7%, 無配偶者の16.0%)はFC機関のみ、有子者の約3割はFC機関を含めたケアを期待していた。布施(2001)は受け手を主体として位置づける点をネットワーク論の利点としてあげているが、このネットワーク論の利点をいかし、高齢者主体のケアを推進する上でも期待ベースのFC/IC組み合わせパターンの類型化は意義があるだろう。高齢者の期待する介護ネットワークを将来提供できるのかという議論や介護の社会化の推進策の検討に本研究の類型による分析が活用することができるのではないか。

第二に、FC/IC組み合わせパターンに関連する要因は、「FCのみ」と「FC含む」に対するロジスティック回帰分析により把握した。高齢者の属性要因の中では、学歴が有意な変数(有子・無配偶者の「FC含む」を除く)であり、高学歴な程、FCを活用した介護ネットワークを期待していることがわかった。この結果は、学歴などの階層がサポートに影響を与えるという他の研究(Krause and Borawski-Clark 1995; 大和2001など)と同様である。

調査時の家族ネットワーク状況の要因の中では、有子・無配偶者の「FC含む」の結果において同居の有無が有意な傾向( $p < .1$ )を示した他は有意な変数がなかった。これは、家族ネットワークの状況に関わらずFCを含める意向が反映されたと考えられる。ただし、今回はFCに焦点をあてた操作化をしており、配偶者や子どもなどICに焦点をあてれば、配偶者の健康状況などが有意な変数となる可能性もある点に留意を要する。

規範要因については、有配偶者の場合、老親扶養義務感が有子・無配偶者の「FCのみ」の結果以外すべて有意であった。性別役割分業観は、有子・有配偶者の「FC含む」に有意、「FCのみ」に有意な傾向( $p < .1$ )を示した。有配偶者の場合は、性別役割分業観が配偶者による介護への期待に影響し、その結果がFCへの期待と関連する傾向がうかがえた。無配偶者の場合は、老親扶養義務感がFCを含めた組み合わせに影響することがわかったが、今後、老親扶養義務感の個人における変容が、どうFCとICの組み合わせパターンに影響するか分析する必要がある。

染谷(2003)は、老親扶養に対する意識は「文化」というよりも、その社会のもつ「制度」によって強く規定されると論じているが、介護の社会化が促進される中で、今後、制度面の変化に伴い規範的意識が変化する可能性も高い。夫・息子への選好の増加や家族ケア役割の嫁から娘へのシフトの傾向(Kono 2000)やケアを頼る相手の息子(とその配偶者)から娘への変化の傾向(染谷2003)など、IC担い手に対する期待レベルの変化の兆しが論じられている。介護の規範意識の変化がICの担い手への期待の変化に関連して、期待レベルのFCとICの組み合わせパターンにも影響し、その結果、FCへの期待がさらに強まる可能性もある。特に無配偶者の場合に問題が顕在化していることから、今回のような配偶者有無別の分析により、さらに規範的要因を含めて分析する意義があるといえる。

第三に、ジェンダーの視点から、組み合わせパターンについて論じてみたい。有子者全体および有配偶者の場合に男女間で期待的介護ネットワークのFC/IC組み合わせパターンが異なることがわかった。これは男性の方が女性より、意識面で介護の社会化や脱家族化がなされていない結果を表わしているともいえる。大和(2004)は、NFRJ98の28-78歳までの有子者の介護ネットワークの男女差について分析し、社会構造的要因(性別役割分業のもと、男性の場合は準制度化された介護者(妻)がいること)と、個人的要因(社会構造に対応した結果、個々の女性のネットワークが多様となること)という2要因両方があてはまると論じている。本研究においても、有配偶女性の方が男性より、



配偶者への期待が低く FC を含める割合が高いことが確認されたが、介護のジェンダー役割が根強い面だけでなく、夫がいても健康上などの理由で期待できない面、女性は要介護時に寡婦になる可能性が高いことを考慮している面などが要因として混在している点についても考慮すべきであろう。また、男性の場合、妻への介護担い手期待が根強いが、状況次第では妻が将来介護できない場合も生じる。有配偶時に介護が必要な場合、いわゆる老々介護をどう社会化して支えるかが課題だが、ジェンダーの構造的要因とそれ以外の要因の両方から、有配偶時の FC と IC の関連を分析する必要がある。

無配偶者の場合は有意な男女差が示されなかったが、男性の数が少ないことが影響しているであろう。これは、実態として多くの女性がケアが必要な時点で、配偶者を喪失している実態が反映されており、配偶者がいない時期における介護の社会化の課題についても、子世代のジェンダー関係を含めて検討すべきである。有子・無配偶者の 5 割強が子等のみを回答しているが、息子、息子の配偶者、娘への期待の変容の兆しを考慮すれば、子等のみを回答が低下し、FC 期待が高まる可能性もある。有配偶時期、無配偶時期のいずれにせよ、期待レベルの FC・IC 組み合わせパターンとその関連要因の分析は、ジェンダーの視点から今後の高齢者ケアを議論する素材を提供しうるといえる。

以上、FC と IC の関連に関する議論を進展させる上での本研究の意義を論じてきたが、二次分析であるための制約や今後の課題についても論じる必要がある。

第一に、データの制約としては、①子とその配偶者が同一の選択肢であることから息子とその配偶者の違いが把握できなかった点、②要介護時に期待するケアの相手を一問で測定しているため、介護の内容を区別した分析ができなかった点、③FC 利用経験や FC 利用可能性など FC に関する独立変数がないため、FC 関連要因の分析ができなかった点、④介護保険制度導入前のデータである点、⑤ケアを頼る相手の組み合わせを期待的ケアとして変数化したのが、期待できるのか期待したいのかが曖昧である点、⑥横断的データである点などがあげられる。

たとえば、高齢者介護に関する世論調査（内閣府 2003）は、1995 年の前回調査と比較し、2002 年の結果は、家族だけに介護されたいという回答が 25.0%から 12.1%に低下し、FC を活用した介護を望む回答の増加を示している。今回のデータは介護保険制度の開始前であるため、認知レベルにおいても現状では IC のみに頼ろうとする比率は低下している可能性がある。今後はこれらの点を考慮し、特に介護保険制度導入の影響や変化も分析する必要がある。同居率の低下や独居後期高齢者の増加などが見込まれる中、今後の高齢者の FC/IC 組み合わせ期待について、さらに縦断調査も含めた実証研究が必要であろう。

第二に、分析枠組みにおける課題として、家族ネットワークに関連する変数を中心に分析したが、独居高齢者の場合やケア内容によっては近隣や友人も重要であり（Cantor 1979）、FC や第三セクターなどの要因も含め、分析枠組みの精緻化が必要であろう。さらに実態との比較や縦断的研究などの実証研究の積み重ねも重要であろう。

結論として、本研究では、期待的介護ネットワークにおける FC/IC 組み合わせパターンに着目し、配偶者や子どもの有無や性別による組み合わせパターンの違いや、組み合わせパターンに影響する要因を分析した。上述の課題はあるが、期待的サポート概念を FC と IC の関連の分析に応用することにより、ケアの実態や財政面だけでなく、高齢者自身の認知・期待面から FC と IC のあり様を分析しうることや、この新たなアプローチからの分析の重要性を示すことができた。本研究の期待的介護ネットワークにおける FC/IC 組み合わせパターンに関する分析の試みは、今後の介護の社会化

のあり様を検討・分析する上でも有益な分析結果を提示できる可能性がある。さらに期待的介護ネットワークにおけるFC/IC組み合わせパターンの理論的枠組みや分析モデルを発展させることが今後の研究課題である。

(注)

二次分析に当たり、東京大学社会科学研究所附属日本社会研究所情報センターSSJ データ・アーカイブから第1回全国家族調査（日本家族社会学会全国家族調査研究会）の個票データの提供を受けました。謝意を表します。

引用文献

- Antonucci, T. C. and Akiyama, H. (1996) *Convoys of Social Relations: Family and Friendships with a Life Span Context*. Blieszner, R. and Bedford, V. H eds. *Aging and the Family: Theory and Research*. Preager Publisher, 355-71.
- Cantor, M. H. (1979) *Neighbors and Friends: An Overlooked Resource in Informal Support System*. *Research on Aging*, (4), 434-63.
- Cantor, M. H. and Brennan, M. (2000) *Social Care of the Elderly: the Effects of Ethnicity, Class, and Culture*. Springer Publishing Company, Inc.
- Fischer, C. S., Jackson, R. M., Stueve, A. C., et al. (1977) *Networks and Places: Social Relations in the Urban Setting*. The Free Press.
- 藤崎宏子(1998)『高齢者・家族・社会的ネットワーク』培風館。
- 布施晶子(2001)「家族福祉とネットワーク」木下謙治, 小川全夫編,『家族・福祉社会学の現在』ミネルヴァ書房, 207-24.
- 権法珠・岡田進一・白澤政和(2004)「大都市在住高齢者のソーシャルサポート源に対する選好度の特徴—手段的サポートと情緒的サポートにおける類似点と相違点—」『社会福祉学』44-3,52-61.
- Greene, V. L. (1983) *Substitution between Formally and Informally Provided Care for the Impaired Elderly in the Community*, *Medical care*, 21 (6), 609-19.
- 平野順子(1998)「都市居住高齢者のソーシャルサポート」『家族社会学研究』10(2),95-110.
- Johnson, N. (1999) *Mixed Economies of Welfare: A Comparative Perspective*. Prentice Hal. (=2002,青木郁夫・山本隆監訳『グローバリゼーションと福祉国家の変容—国際比較の視点—』法律文化社.)
- Kono, M. (2000) *The Impact of Modernization and Social Policy on Family Care for Older People in Japan*, *Journal of Social Policy*, 29 (2):181-203.
- 古谷野互・安藤孝敏・浅川達人ほか(1998)「地域老人の社会関係における階層的補完」『老年社会科学』19-2,140-50.
- Krause, N. (2001) *Social Support*, Binstock R. H. and George L. K. eds. *Handbook of Aging and the Social Science*, Academic Press, 272-94.
- Krause, N. and Borawski-Clark, E. (1995) *Social Class Differences in Social Support*. *The Gerontologist* 35 (4), 498-508.
- Litwak, E. (1985) *Helping the Elderly: The Complementary Roles of Informal Networks and Formal Systems*. The Guilford Press.
- 前田尚子(1999)「大都市インナーエリア高齢者の世代間関係」『家族社会学研究』11, 83-94.
- 内閣府(2002)『平成14年度版高齢社会白書』
- 野口裕二(1991)「高齢者のソーシャルサポート：その概念と測定」『社会老年学』34,35 - 48.
- 奥山正司(2000)「高齢期家族の機能と高齢者の家事役割」染谷淑子編『老いと家族:変貌する高齢者と家族』ミネルヴァ書房,50-77.
- 下山昭夫(2000)「高齢者の扶養と介護の社会化」染谷淑子編『老いと家族:変貌する高齢者と家族』ミネルヴァ書房, 205-25.
- 白波瀬佐和子(2000)「家族内支援と社会保障—世代間関係とジェンダーの視点から—」『季刊・社会保障研究』, 36-1, 122-33.
- 染谷淑子(2003)「社会変動と日本の家族—老親扶養の社会化と親子関係」『家族社会学研究』14(2). 105-14.
- 杉本貴代栄(2001)「社会福祉とジェンダー—研究の方法・到達点と課題—」『社会福祉研究』81, 14-21.
- 栃本一三郎(2000)「介護保険制度創設の諸問題—いかなる視点から評価すべきか—」『社会福祉研究』79, 22-33.
- 内閣府(2003)「高齢者介護に関する世論調査」(<http://www8.cao.go.jp/survey/h15-kourei/2-1.html>, 2004. 2. 27)
- 渡辺秀樹・稲葉昭英・嶋崎尚子編著(2004)『現代家族の構造と変容：全国家族調査 [NFRJ98] による計量分析』東京大学出版会。
- 大和礼子(2000)「“社会階層と社会的ネットワーク”再考—〈交際のネットワーク〉と〈ケアのネットワーク〉」

『社会学評論』51(2), 235-50.

大和礼子(2001)「なぜ女性は“多様な”介護ネットワークをもつのか」石原邦夫・大久保孝治編『家族生活についての全国調査報告書(NFR98)No 2-6: 家族生活におけるサポート関係と高齢者介護』53-78, 日本家族社会学会全国家族調査(NFR)研究会.

大和礼子(2004)「介護ネットワーク・ジェンダー・社会階層」渡辺秀樹・稲葉昭英・嶋崎尚子編著『現代家族の構造と変容: 全国家族調査 [NFRJ98] による計量分析』東京大学出版会, 367-385.

**Expected Care Network for the Elderly: Analysis of the Combined pattern  
of Formal and Informal Care**

**Yamaguchi, Asae**

**Abstract**

The purpose of this study is to analyze the expected care network for the elderly based on the combination of formal care(FC) and informal care(IC) from a gender perspective. This is a follow-up analysis of the national data(NFRJ98: N=1503, Age 65-77) collected in 1999. The analysis of the pattern in the expected care network based on having any child showed that about 10 % of the elderly only FC, while 30% of the elderly expected care network including FC. Significant differences were found between males and females in case of the elderly with children. The results of logistic regression analysis showed that, in the case of individuals with a spouse and any child, education, gender norm and filial responsibility norm were related to the response including FC. The findings of this study suggest the importance of analyzing the expected care network based on the combined pattern of FC and IC in considering the issue of the relationship between FC and IC in the long term care policy.

**Key words**

Expected care network for the elderly, Combined pattern of formal and informal care, Shared care, Gender, Social care